

「パターン変数」の批判的再構成：  
三つのテキストにおけるパラドックスを中心に

川 越 次 郎

**A Critical Reconstruction of “Pattern Variables”:  
Centering around a Paradox between Three Texts**

**Jiro Kawakoshi**

**Summary**

This paper aims to present a reconstruction of “pattern variables”. After T. Parsons wrote “Pattern Variables Revisited” (1960), he has never taken into account of this theoretical apparatus twice, in spite of preceding not a few energetic theoretical revisions. I conceive, however, this apparatus still has held a very significant position in his whole theory of action. In this point of view, I try to review and reconstruct “pattern variables” by pointing out his some theoretical problems, especially centering around those which can be conceived as a “paradox” between his three texts.

**Key words**

Action, Pattern Variables, AGIL Model.

1953年、T. パーソンズと R.F. ベールズを中心にして出版された『行為論における作業論文集』〈文献 e〉は、社会学史上のひとつの「記念碑」として、現代社会学にとってはすでに古典的な存在になっているとあってよいだろう。とりわけ、パーソンズがベールズと共同執筆した第三章「行為空間の諸次元」および E.A. シルズも加えられた第五章「動機との関連における位相運動」は、今日の多くの社会学者たちに、直接的であれ間接的であれ、あるいは受容的であれ批判的であれ多大な影響を与えた最も重要な論文であると思われる。パーソンズの代表的な理論的概念装置といえば、誰しもがパターン変数と AGIL モデルを想起するだろう。時間的に前後する彼の「パターン変数時代」と「AGIL 時代」とを架橋するのがこの二つの論文にほかならない。

そもそも、人間の社会的行動に関するさまざまな理論、すなわち行為論 (theory of action) はひとつの一般的な理論図式へと収斂する段階に達しつつあり、パーソンズとベールズの共同作業の目的は「かかる大なる収斂過程についてのさらにつき進んだ最新の段階を立証することにある」〈*ibid.*, p.63〉とされる。「われわれの信ずるところによれば、その立証作業は、社会的相互作用 (social interaction) をひとつの一般化されたやり方を取りあつかうことがほぼ可能となるところまでいっているはずである」〈*ibid.*〉。

彼らによれば、社会的相互作用論には、それぞれが別個に注目し研究してきた五つの主要な研究部門があるとされる。

(1)社会的相互作用の直接的な観察と分類のための諸カテゴリーのセット(ベールズ)(2)行為における選択のディレンマを分類するパタン変数のセット(パーソンズ)(3)制度化された諸社会システムにおける逸脱行動の諸局面を分類するパラダイム(パーソンズ)(4)それに対応する, 社会的制御の諸局面を分類するパラダイム(パーソンズ)(5)シンボリズムの特性およびそれと相互作用との関係についての最近の研究(パーソンズ, ベールズ) <cf. *ibid.*, pp.63-70>。

社会的相互作用論, ひいては行為論は, 以上五つの部門を比較, 分析, 総合することによって, すなわち, パーソンズとベールズがそれぞれにすでになしとげてきた業績を新たなかたちで統合することによって極めて高度の一般性を獲得しうる, というのが彼らの主張・自負なのである。

\*

上記五つの研究部門の中心に位置するのが, パーソンズの「四組」のパタン変数の組み合わせと, ベールズの, 機能する社会システムとしての小集団における「四つ」の主要な機能的問題との「出会い」に他ならない。その重要性は第五章論文の中で端的に次のように述べられている。

「根本的な諸概念のもつ最も肝要な点は……次のようなものである。第一に, ベールズの四つの機能的問題に照応する四つの次元という考え方であり, これは, パーソンズとシルズによるパタン変数の諸概念によって定義づけられている。第二に, この四つの次元の位置と運動という考え方。第三に, ベールズの相互作用の諸カテゴリーであり, これもまたパタン変数の諸概念と結びつけられている。第四に, パーソンズの初期刊行物にみられる逸脱と社会的制御を分析するための諸パラダイム。そして最後に, (本書の)第二章ですでに展開してきた, シンボリズムおよびその過程に関する分析」 <*ibid.*, pp.163-4>。

本稿の目的は, パーソンズの「四組」とベールズの「四つ」との記念碑的な「出会い」の(ある意味では極めてスコラ的な)詳細を吟味することにあるのではない。ここではただ, この「出会い」の結晶として残されている, 「パーソンズとベールズの相互作用類型論において照応する諸要素」と銘うたれた図 <*ibid.*, p.74> およびそれに関する若干のコメントを図0として稿末に紹介しておくにとどめる。

私が注目したいのは, パーソンズのパタン変数論はこの「出会い」によって, それ「以前」の変数論とくらべてある決定的な変貌をとげたということ——関心のある社会学者ならば誰しものが認めることである——を前提にして, 時間的には先行するこの「以前」のパタン変数論と, 後続する新たなパタン変数論との理論的な位置関係である。両者は確かに時間的には前後関係にある。だが実は, 理論的にはその位置関係は逆転していると考えられる。パーソンズ行為論を批判的に再構成し, 私自身の新たな理論仮説を提示することが本稿の目的であるが, それによってこのパラドックス(逆転関係)はおのずとつかびあがってくることになるだろう(だがすぐ後にみていくように, 第二のパラドックスもまた存在する)。

\*

ここで, 全体的な見通しをよくするためにパタン変数論の変遷を大まかに整理しておこう。その原点は, 近代社会類型論の淵源に立つと目される F. テンニースのゲマインシャフトとゲゼルシャフトという素朴な二項対立図式に懐疑の目をむけることにあった。具体的には, 医者—患者関係はテンニースの二者択一的な類型論では説明しきれないということに着眼することによってパタン変数の構想が出発したのである。知的専門家としての医者と患者の役割・役割期待関係を

みるならば、これは明らかにゲゼルシャフトの関係であるし、また、医者が自らの利害関心よりも患者の健康を優先させるという規準からするならば、この社会関係はゲマインシャフト的である。二者択一の変数論ではわりきれない、さらに多様かつ精緻な変数論を導出することが必要であった。この出発点を端的に示しているテキストを《I》とし、以下、私にとって重要であると思われるクリティカルな転回期を代表するテキストを《II》《III》として、それらを中心に論議を進めていくことにしよう。

《I》 「専門職と社会構造」1939〈文献a〉。パーソンズは、この論文が書かれた17年後、『経済と社会』の中で、パタン変数の四組のうち三組まではすでにここで「例証されている」と明言している〈文献f, p.34. footnote, 訳書I, 61頁〉。彼が、専門的職業人としての医者と患者の役割・役割期待関係を主として例解しながら、最初に提示するパタン変数の対立する組みあわせは次の三通りである。

(1)自己関心 (self-interest) 対 無関心 (disinterestedness)。 (2)機能的限定性 (functional specificity) 対 機能的多面性 (functional diffuseness)。 (3)普遍性本位 (universalism) 対 個別性本位 (particularism)。

(1)の二つの対立変数は、いわゆる「利己的 (egoistic)」対「利他的 (altruistic)」の区別と同じものではない。しかしながら、self-interest には「私利私欲」、disinterestedness には「公平無私」という意味あいが強うかがわれる点からでもあろうか、後にこれは、より一般的な用語、すなわち自己志向 (self-orientation) 対 集合体志向 (collectivity-orientation) に変えられている〈文献b, c〉。(2)に関しては、たとえば近代的専門職の権威は、特定の各専門領域における各人の優れた知識・技能が機能する限りにおいて初めて保証される(機能的限定性)。それに対して、親族・婚姻関係等においては、各人は特定の機能領域に限定されることなく、多面的な社会関係を取りむすぶ(機能的多面性)。(3)については、たとえば心臓の専門医にとっては、患者が誰の息子か夫か友人かということとは無関係に心臓疾病それ自体が問題とされる。「誰が」が問題なのではなく、「何が」が問題なのである。「個別的人間との個別的社会関係から独立した諸標準、諸基準は普遍的とよぶことができる」(普遍性本位)。それに対して、たとえばAの父親が同世代の他の全ての男性と区別されるのは、彼がAと特定の個別的关系に立っているからである。「個別的人間との個別的社会関係に適用される諸標準、諸基準は……個別なものである」(個別性本位)〈文献a, pp.41-2〉。以上三組の対立変数関式が、パーソンズ自身がすでに「例証されている」と認めるパタン変数論の原初形態であるといつてよいだろう。

しかしながらここで注目しておかなければならないのは、パタン変数論の展開を大きく「対立変数論」時代(《II》によって代表される)と「親和性 (affinity) 仮定にもとづく変数論」時代(それはまさしく《III》の『作業論文集』によって開始された)に二分するならば、実はこの《I》の段階ですでに、親和性仮定変数関式(四組)のうち二組が暗示的に提出されている、という点である。二箇所ほどその例を引いてみよう。

専門職に関する研究は、近代社会の職業構造の解明に光をあてるものであるが、その職業システムと対照的な他のシステムとして、彼は家族、親族、友人関係等をあげながら次のように述べている。「方向と程度の違いはあるけれども、これらすべての場合(家族、親族、友人関係等・筆者)個別性本位が(職業システムにおける・筆者)普遍性本位に、そしてまた機能的多面性が(職業システムにおける・筆者)機能的限定性にとってかわる傾向がある。幾分かはそれらは伝統主

義の傾向を有している」(ibid., p.46)。さらにはまた、次のようにも述べる。「たとえば会社や役所における管理ヒエラルキーは、ある制度的なパターンを有しているが、それはすぐれて普遍性本位的、かつ機能的に限定的なものである」(ibid., p.47・傍点は筆者)。

要するに、1953年のテキスト《III》第三章で初めて正式に提示された四組の親和性変数図式のうち二組——すなわち、「普遍性本位—機能的限定性」と「個別性本位—機能的多面性」——が、1951年の《II》において体系的にまとめられた対立変数図式に先立って、1939年のこの「原初的」な段階で、未分化なかたちながらすでに提出されているのである。先に私が「第二のパラドックス」があると述べたのは、この点をさしている。

《II》『行為の一般理論をめざして』1951〈文献b, なお、同年ほとんど同時に出版された文献cも参照のこと〉。このテキストにいたる以前に、すでに《I》の「対立変数図式」にはさらに第四の組みあわせ「感情性 (affectivity) 対 感情中立性 (affective neutrality)」が追加されている。これは、対象にむけてとる、適切と考えられる態度の型にかかわる二分法である。ほとんどの親族関係とか友人関係の場合には、積極的に「情動的な」態度をとることが許されるだけでなく期待されるのであるが、たいがいの職業的役割の場合にはそれは適切なこととはされない。たとえば医者、患者を「職務」上の脈絡においてとりあつかうよう期待され、ひとりの人間として、患者とあまり深い「情動的な関係」に立ちいたることは期待されない。要するにこれは、積極的に情動的な態度をとることが正当とされるかどうかという問題である〈cf. 文献f, p.35, 訳書56-7頁参照——なお、訳文、訳語は訳書とはかなり異っている。以下同〉。

さて、このテキスト《II》にいたってさらにもう一組の二分法、すなわち「帰属性本位 (ascription) 対 業績性本位 (achievement)」がつけ加えられることになる。これは文化人類学者 R. リントンの区別をそのまま借用したものである。この第五の一組は、のちに「社会システムのあるタイプの諸問題にあまりに限定的に方向づけられているきらいがある」(ibid., p.35, 同57頁参照)のために——すなわち、「行為の一般理論」にとっては一般性 (generality)の度合いが低いという理由によるのであろう——のちにテキスト《III》で「より一般的な用語」, 「特質本位 (quality) 対 遂行本位 (performance)」にあらためられている〈文献e, p.66〉。

ここでパターン変数は次のように定義されている。「パターン変数とは二分法であり、状況 (situation) の意味が行為者にとって確定する以前に、したがって、行為者がその状況にかかわって行為することが可能となる以前に、行為者はその二つのうちのいずれかを選択しなければならない。われわれは次のことを主張する。(行為論の準拠枠から直接導出される・筆者) 基本的なパターン変数 (の組みあわせ・筆者) はただ五つしかなく、そしてまた、それらはかくして導出される (すなわち、行為論の準拠枠から直接導出される・筆者) すべてのパターン変数であるという意味において、ひとつのシステムを構成するのである」(文献b, p.77, 訳書124頁参照)。

五組の対立変数はそれぞれ、行為に先立って行為者が選択しなければならない「ディレンマ」をさし示している。すなわちそれらは、行為を「どの方向へもすみやかに進ませる」ことができなかった場合、その状況における二者択一的な選択の五対の主要なディレンマを定式化するものとして考えられている。さらにまたこの二分法は、テキスト《I》にみられるような役割ないしは役割期待を中心とした社会システムの構造的諸要素の分類にとどまることなく、パーソナリティ・システムの欲求性向、および文化システムの価値志向パターンの分類にまでその守備範囲を拡張している〈cf. ibid., pp.80-8, 同128-40頁参照〉。

社会システム、パーソナリティ・システム、文化システムの関係は次のように整理されよう。まず、行為の準拠枠の諸成分は「主体(the subject)」と「客体(the object)」とに大別される。主体とは「行為者—主体」のことであり、相互作用状況内では「自我(ego)」とよばれ、その状況に対する行為の志向(orientation)のあり方が分析上の問題とされる。行為者—主体は単に「行為者」とよばれる場合があり、それは常に「ひとつの行為システム」である。かかるものとしての行為者は、(a)単数のパーソナリティ(a personality)であるか、(b)単数の社会システム(a social system)であるか——すなわち、個人としての行為者であるか、複数の個人からなる集合体としての行為者であるか——のいずれかである。(b)は(a)の集合にほかならないから、行為の一般理論の目的にとっては、状況に志向する「行為者」は必然的に(b)にも適合する、とパーソンズは考えているようである(この点に関して私も異存はない。たとえば、G.H. ミードの「me」, 「I」概念にヒントを得て私が構成した「us 構造」「We 構造」に関する記述〈文献1, 235頁〉を参照されたい)。

客体とは、行為者—主体が志向する諸対象(objects)のことであり、「社会的対象」と「非社会的対象」に二分される。社会的対象とは、「主体」の場合と同様「行為者」すなわち「行為システム」(ただし複数形で示される)のことであり、相互作用状況内では、これは自我に対して「他者(alter)」とよばれ、分析上問題とされるのはその「客体」としての側面である。かかるものとしての他者は自我の場合と同様——ただし複数形で示される——(a)パーソナリティ(個人)であるか (b)社会システム(集合体)であるかのいずれかである。また、非社会的対象は、(i)物理的对象と(ii)文化的対象(すなわちシンボルないしはシンボル・システム)とに区別される。(ii)は行為の準拠枠という観点から文化システムをとらえて、それを抽象化したものである。以上の関係をパーソンズは図1のように整理している〈文献dおよびh 訳書第一章(拙訳)44頁〉——なおこの章は *Psychiatry*, Vol.15, No.1, February, 1952. から転載されたものであるが、その要旨は、テキスト《II》が出版されたのと同年、1951年、オハイオ州シンシナチ市で行なわれたアメリカ精神医学会の精神分析学部会ですでに発表されたものである。したがって、図1は、テキスト《II》における錯雑な社会システム、パーソナリティ・システム、文化システムの諸関係を端的に圧縮・整序したものと考えてよい。なお、図1はテキスト《III》(p.29)にもそのまま転載されている。

図1は、S.フロイトの有名な精神構造(パーソンズに言わせればパーソナリティ・システム)図式を大幅に修正したものである。フロイトとの相違は、第一に、フロイトの図式では超自我は自我の脇に位置づけられているが、パーソンズは超自我を内面化された文化システム(内面化された文化的対象)の焦点として扱うため、それは自我(パーソナリティ・システム)の中央部におかれている。第二に、超自我を基本的には自我の部分として扱うという点ではフロイトと同じであるが、パーソンズはこの考え方をさらに、内面化された文化の三つの成分のすべてを自我の部分として取り扱うところまで広げている。第三に、彼は図1に、フロイトがまったく考慮に入れなかった区別を導入している。それは、パーソナリティ内部に内面化されたものとしての文化的要素と、状況における対象としての文化的要素の区別である。

#### 〈文化的対象〉

1. 認知的準拠システム(カテゴリー化システム)
2. 共有される道徳的諸規準
3. 表出的シンボリズム

#### 〈内面化が行なわれた主体と社会的対象〉

1. 内面化された自己—対象心像

- 2. 超自我
- 3. シンボルとして組織化された感情

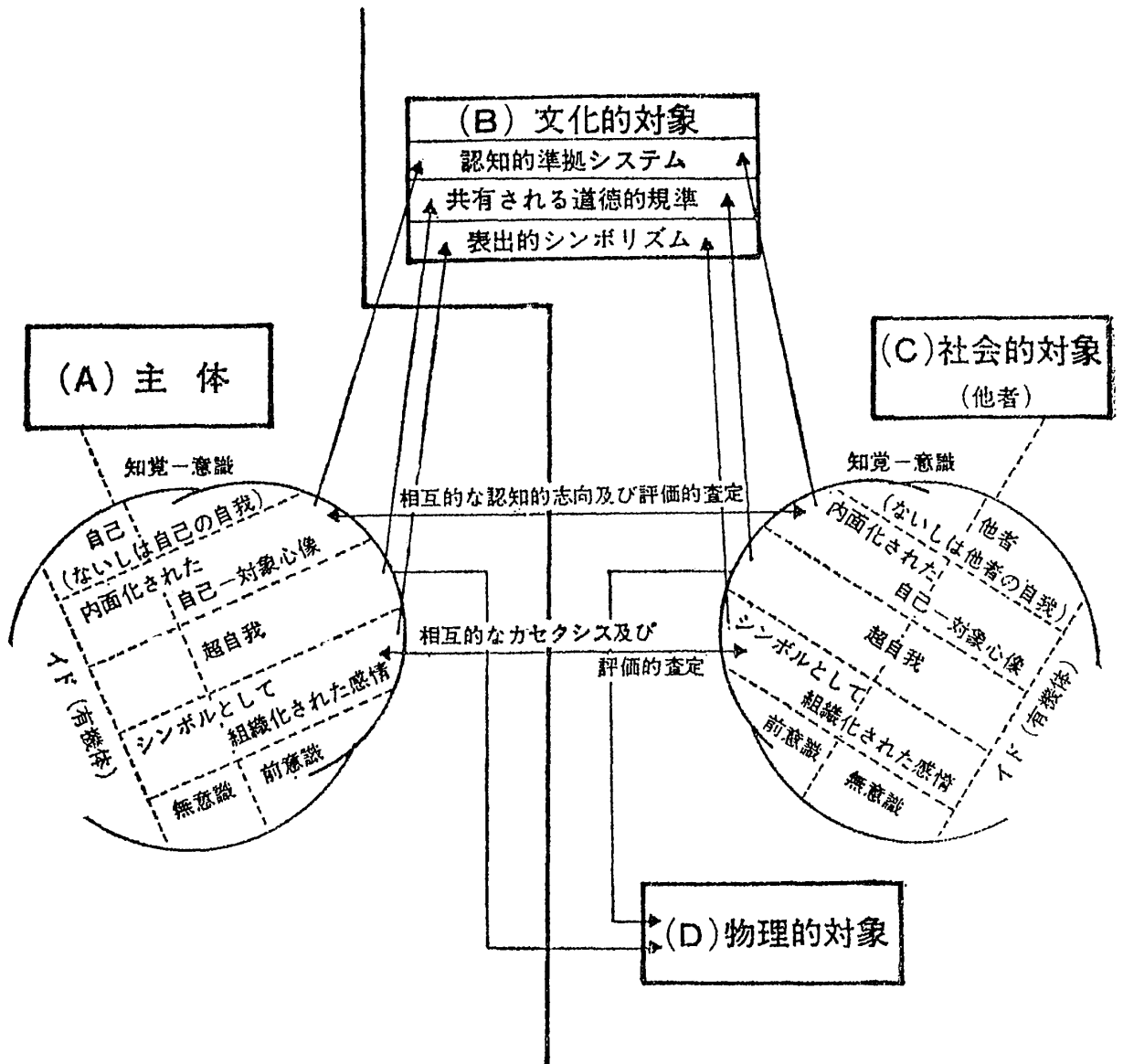


図 1

それぞれの1. 2. 3. は照応関係にあることが一目瞭然であるだろう。パーソンズによれば、自我は文化システム(文化的対象)の三つの要素のすべてを含むものなのである。また彼は次のように述べている。「私は、自己(自我・筆者)は他者および非社会的状況の双方に志向するものであると考える。この非社会的状況とは、物理的対象と文化的対象の両者を含む。その志向は双方共に認知およびカセクシスを含み、かつ双方とも評価的査定(evaluative appraisal)に従う。だが対象が他者である場合にのみ、その志向は相互的なものとなる」(同、45頁)。

社会システムとは、自我(ego)と他者(alter)の相互的な志向(行為)連関、すなわち相互作用システム(interaction system)に他ならない、とするのがパーソンズの基本認識である。それは、ミニマムには図にみるように二項行為者モデルとして提示されている。もちろん、すでにみたように、複数の社会システム(集合体)がいわば「集合的自我」なり「集合的他者」として相互作用を行ない、より上位の社会システムを構成することは理論的に可能である。

ここでおさえておくべき重要な点が三つある。

① パーソンズは、超自我を内面化された文化システムの焦点として最重要視している。この超自我に照応する文化システムの成分は共有される道徳的規準である。つまり、内面化された共有される道徳的諸規準が超自我を構成する。図1中 $\longleftrightarrow$ で示された二つの相互連関に注目されたい。ひとつは「相互的な認知的志向及び評価的査定」であり、もうひとつは「相互的なカセクス及び評価的査定」である。前者をとり結ぶパーソナリティ内成分は「内面化された自己—対象心像」であり、後者のそれは「シンボルとして組織化された感情」である。相互作用はこの二つの成分を含むレベルでのみ行なわれる。内面化された共有される道徳的諸規準としての超自我は、それ自体陽表的(overt)な相互作用には加わらない。ただし、それは二つの相互連関を「評価的に査定するもの」として、パーソナリティ・システム(自我と他者)および社会システム(相互作用システム)に対して決定的に重要な影響を与えるものとして位置づけられているのである。

自我と他者、そして文化を構成する三つの主要な要素は、いわゆるあの「知・情・意」論(その淵源を私は知らない。古代ギリシア哲学に由来するものでもあろうか。教示を乞いたい)と重なりあうことが明白であろう。1. は知に、2. は意に、3. は情にそれぞれ対応している。そして2. の「内面化された道徳的諸規準」を中核としてパーソンズの「行為の一般理論」が展開されるのである。そこにはっきりと「文化決定論者」としてのパーソンズ像を読みとることができる。

② ①に関連して、パーソンズは行為連関の「連続性」を前提とする論者であるということを目指しておかなければならない。私はかつて文献0において、対話(行為連関)における「連続性」は「断絶」を前提にするという点について論じたことがある。「われわれは『理解されるために語り、書く』以前に、すでに何かしらのものごとについて『理解している』。対話者のおのおのが『理解していること』は同一のものではありえない——あるいは少なくとも同一のものであるという保証はない。ここに『断絶』が前提される。しかるべき後に『理解を求める』という行為が生じる。前後関係は決して逆転を許すものではない。その限りで、対話における『連続性』は『断絶』を前提にしているといわなければならないだろう」(文献0, 122頁)。

「理解している」とは、対話の場においては「他者(alter)」の語りかけなり発話の意味を「自我(ego)」が決定するということである。たとえば、私がある学会の「パーソンズ部会」で参加者たちにむけて研究発表をしたとする。その場合、語りかける「自我」は私であるが、私はそれ以前に、パーソンズのテキストが語りかける意味を決定する「自我」である。語りかける「自我」としての私にとっては参加者Aは「他者」である。だがその「他者」はまた私の語りかけの意味を決定する「自我」である。次の段階でも同じことが繰り返される。私の語りかけ(発表)をテキストとして、その意味を決定するのはAという「自我」である。しかる後にこの「自我」は私という「他者」に(たとえば反論というかたちで)語りかける。だがその「他者」はAの語りかけの意味を決定する「自我」である。対話(行為連関)すなわち相互作用(interaction)とはこのことの際限ない繰り返しである。そのなかで、相互主観的な何らかの「真偽問題」や「当否問題」の解決がはかられていく。だがその解答はこのようなコンテキストからみた場合、常に仮説性を帯びたものにならざるをえないだろう。

「語りかける」自我と「語りかけの意味を決定する」自我との関係を図2によって整理しておく(同, 123頁に掲載された図を参照。なお二つの図の間には部分的な変更がある)。

他者からの語りかけ(すなわち問題のインプット)と他者への語りかけ(すなわち解答のアウト)

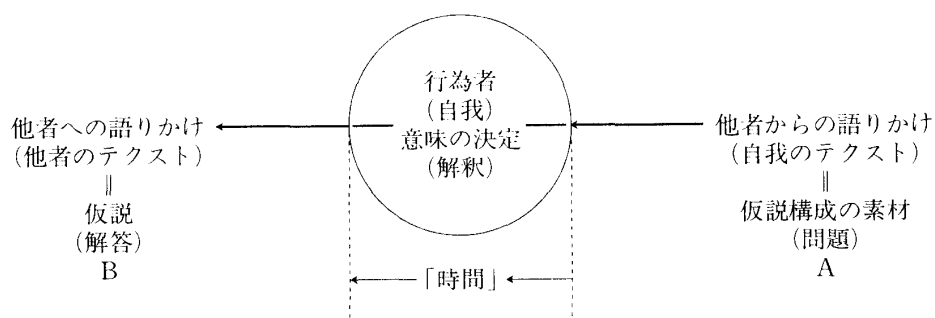


図2

トプット)の間には明らかに「時間」——それは天文台の観測にもとづく公的な時計の時間ではなく、W.I.トマスのいう「吟味と熟慮」の時間である——が介在している。このこと自体がすでに原理的に「断絶」をさし示している。問題(シンボルないしはシンボル・システムAによって表示される)が自我の時間の中で解答を得るべく、個別的な(particular)諸要素( $a_1, a_2, \dots, a_n$ )に分解され、さらに $a_1, \dots, a_n$ 間の関係の多面的な(diffuse)検討が行なわれる。かくして解答(シンボルないしはシンボル・システムBによって表示される)が得られる。そのとき、解答としてのBが実は問題としてのAと全く同一である( $B=A$ )ということがしばしばおこりうる。しかしながらこの場合でさえも、自我にとっては同一のシンボルで表示される意味(meaning)はまったく別のものである。あくまでもAは「問題」として解釈されるべきテキストとしての意味を有し、Bは「解答」として解釈されたテキストとしての意味を有する。意味を表示するシンボルが同一であっても、それが表示する意味が同一であるということはいかなる場合であってもありえない。

「断絶」を大前提とする私の所論と、「内面化された共有される道徳的規準」を根拠に「連続性」を前提とするパーソンズ——彼がこれによって社会的統合の問題、すなわち「ホブズ問題」の解決をはかろうとしたのは明白である——の立論とは極めて根本的な点で本質的に対立するものである。連続性を理論の前提に置く論者と断絶を前提とする論者とでは、「相互作用」に対する基本認識も必然的に異なってくる。前者の場合、その相互作用論は、共有文化に媒介されて行為する二人の行為者間の連関をミニマムな前提として、そのダイアド・モデルを構成することから出発する。だが後者は、前者の前提の「さらなる前提」として一人の行為者の行為を措定し、単一行為者モデルを構成することにその出発点を置く。すなわち、相互作用(行為)論は単一行為論を前提する、と考えるのである。

③ 文化システムは、パーソナリティ・システムおよび社会システムとは異なった平面に位置している。というのも、他の二つのシステムが個人として、集合体として、それぞれに「具体的な行為システム」であるのに対して、文化システムは人為的なシンボル・システムとして存在しはするが、決して具体的に志向することも行為することもしないシステムだからなのである。すなわち、文化システムは「それ自体、行為システムとして組織化されることはない」(文献b, p.7, 同, 10頁参照)からなのである。具体的な行為(システム)とは次の四つの観点によってとらえられた行動(behavior)である。1. 目的や目標ないしは他の予期された事態に志向している。2. 状況の内部で生じる。3. 規範的に規制されている。4. エネルギーの消費、努力、ないしは「動機づけ(motivation)」を含んでいる(《ibid.》, p.53, 同, 86頁参照)。文化システムはこの四つの条件を満たしてはいないがゆえに行為者となることはできない。

しかしながら(テキスト《III》をとばして)1960年の「パタン変数再訪」論文(文献g)の段



階にいたると事態は一変する。「全体的行為システム (the total action system) のどのレベルで分析を行なうかを問わず、いかなる場合であっても『行為者』概念は、役割をになった個々のパーソナリティを定義するだけでなく、他のタイプの行為単位——すなわち集合体、行動有機体、そして文化システム——をも定義するところまで拡張される。行為者という用語は、ここではかかる行為単位のすべてに関して用いられるものであるから、私は——類推するとか例解するという場合をのぞいて——たとえば『動機づけ』のような個人としての行為者に帰せられる心理学的用語への言及を排除しようと試みている」〈文献g, p.194・傍点は筆者〉。すなわち、この段階にいたっては文化システムもまた行為者として位置づけられることになる。この論理をつきつめれば、パーソンズは行為にかかわるあらゆるシステムについてのすべての変数を——パタン変数に限らない——「行為者」としてとらえていくことになるだろう（この「変数」とは、自然科学、社会科学のいかなるかを問わず、その研究対象から析出されるもろもろの分析概念一般を示すものとして考えられよう）。そのとき、「生きている有機体の行動 (the behavior of living organism)」〈テキスト《II》p.53, 訳書86頁参照〉は純然たる「記号 (sign)」の世界で語られることになる。行動を四つの条件を満たすものとしてとらえたとき行為、行為者（これは集合体にも適用可能なものである）概念が提出される。ここまでは私も一応納得する。しかしながら、この四条件を離れて、記号一般を「行為者」として取りあつかうことには重大な理論的かつ論理的な飛躍があるのではないのか。つまり、「行為の一般理論」を構想する者にとって、その依って立つところの最も重要な準拠点を見失ってしまうことになるのではないのか。私はそれを危惧するのである。この行為者概念に限らず、難解かつ複雑きわまりないパーソンズ概念図式の展開を着実に跡づけようとする試みは徒勞に終るのではないかとさえ思われる。というのも、彼の多様かつ膨大な記述には、テキストとテキストの間にしばしば理由ぬきの改訂がみられ、そこには何よりも理論的な首尾一貫性が欠如しているからなのである（もっとも、その飛躍を理論的な前進としてとらえ、積極的に評価する論者もいるだろう）。

ここで、テキスト《II》のパタン変数図式にさらに立ち入って整理・概観しておく必要がある。先にみた「ただ五つしかない」基本的な対立変数の組みあわせは次のとおりである。

(1) 感情性 対 感情中立性。(2) 自己志向 対 集合体志向 (《I》の自己関心 対 無関心の改訂)。(3) 普遍性本位 対 個別性本位。(4) 帰属性本位 対 業績性本位 (のちに特質本位 対 遂行本位と改訂)。(5) (機能的)限定性 対 (機能的)多面性。

(1), (2), (3)の対立変数は状況内対象に対する行為者の志向様態 (mode of orientation) のディレンマ (志向様態間の優位性の問題) から導出されたものであり、(4), (5)の対立変数は対象状況 (object situation) に内在するディレンマ (対象状況における不確定性の問題) にかかわるものである。この「志向様態」、「対象状況」という二つの用語は同テキスト〈p.253, 訳書405頁参照〉に第五図として提示された「動機志向」「価値志向」にそれぞれ対応するはずである。この図表は、同じ年に出版された文献c, p.105 (訳書114頁参照) で「パタン変数のグルーピング」と銘うたれて、より簡明なかたちに変換され、図3のように示されているし、さらにまたテキスト《III》においてもこの図表はそのまま引用されている〈文献e, p.67〉。

くどいようだが、この図は同じ年に出版された二冊のテキストが共有する図表である。だがここで奇妙なことがおこる。第一に、《II》(文献b)の本文におけるパタン変数のグルーピング——すなわち(1), (2), (3)のグループと(4), (5)のグループ——と、この図にみるグルーピング——すなわち(1), (2), (5)のグループと(3), (4)のグループ——とがはっきりと異なっている。つまり、

(3)の普遍性本位—個別性本位と(5)の限定性—多面性が本文と図表とでは交互にいわれかっているのである(本文のグルーピングを端的に示している箇所としてはテキスト《II》pp.76-7《訳書123-24頁》およびp.84《同134頁》を参照のこと)。これは、私の図表の読みとり方の間違いによるものではない。同一の図表を説明する文献cの本文では、まさしく図表どおりのグルーピングがなされているからである。行為システム一般の準拠点として、一方の極に動機志向を、もう一方の極に価値志向を置きながらパーソンズは次のように述べる。「パタン変数の二つのもの(感情性—中立性と、多面性—限定性・筆者)は準拠システムの方の極(動機志向・筆者)に特別に関連しており、他の二つのもの(普遍性本位—個別性本位と、帰属性本位—業績性本位・筆者)はもう一方の極(価値志向・筆者)にとりわけ関連し、第五のもの(集合体志向—自己志向・筆者)は、いわば両極のあいだで『中立的』である」(文献c, p.102, 訳書113-4参照)。「中立的」なパタン変数である集合体志向—自己志向は、《II》では、図3と文献cに明記される「動機志向」の一員であったはずである。これが第二の奇妙な点である。

ほとんど同時に出版された二冊の書物の中で、いやその一冊の中ですらパタン変数図式はすでに目まぐるしく変化し錯綜しているといわなければならない。

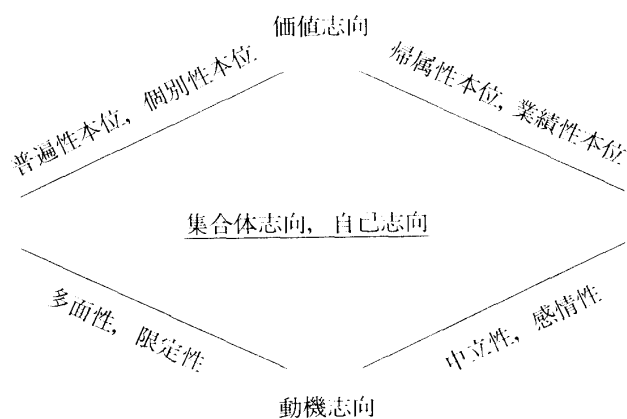


図3

\*

文献cで、「動機志向」にも「価値志向」にも属さない「中立的」なものとして位置づけられた「集合体志向—自己志向」は、ここですでにパタン変数の理論構成上いわば「余計もの」扱いされはじめているとあってよいだろう。あるいは少なくとも、パタン変数の中核をなすのはそれ以外の「四組」である、ということがはっきりと意識されているとあってよい。そしてついに、1953年のテキスト《III》の第三章論文「行為空間の諸次元」にいたってこの対立変数はパタン変数図式から完全に排除されることになる。「五つ目のパタン変数、すなわち自己志向 対 集合体志向は、他のいかなる変数とも組みあわないし、またそれ自体、分類上の態度の側にも、状況ないしは対象カテゴリー化の側にも属さない。それというのも、この変数は、孤立したものとして考えられた各行為の内部問題というよりも、むしろ相互作用システムの内部問題にかかわるものだからである。すなわち、何らかの特定の活動領域のなかでの個々の行為者の志向が、集合体内部の他者たちとの連帯から直接構成されているのかどうか、はたまたそれは一定の境界の内部でかかる連帯からは独立したままであったり、独立したりするものであるのかどうか、という問題にかかわっ

ている。したがって、この第五のパタン変数は、行為システムを分析するうえでの最も一般的な目的のためには無視することができよう」〈文献 e, pp.66-7・傍点は筆者〉。

引用中「態度の側」と「状況ないしは対象カテゴリー化の側」は、それぞれ次のように説明されている。態度の側とは「対象に対する行為者の態度、とりわけ他の行為者である社会的対象に対する態度をいかに組織化するかを決定する場合に、行為者が直面するディレンマに関するものである」(ibid., p.66)。「感情性 対 感情中立性」と「機能的 多面性 対 機能的 限定性」がこの側に位置づけられる。対象カテゴリー化の側とは「諸対象それ自体を相互の関係のなかで、また行為者の動機関心との関係のなかでいかにして組織化するかを決定する場合に、行為者が直面するディレンマに関するものである」(ibid.)。「普遍性本位 対 個別性本位」と「特質本位 (quality) 対 遂行本位 (performance)」——テキスト《II》における「帰属性本位 対 業績性本位」の改訂——とがこの側に位置づけられる。

私はこれまで各パタン変数の訳語を「～性」と「～本位」の二通りに使いわけてきた。それはここにみる「態度」を組織化する側の変数と「対象」を組織化する側の変数とを区別するためであった。この二つの「組織化」にかかわる四つの基本的な対立変数の組みあわせは、図3の組みあわせと（用語の一部変更をのぞいては）一致するものであり、以後、1960年の文献gにおいてパタン変数の集大成的な論議の幕が閉じられるまで変更されることはなかった（なお、文献gに対する私の批判的検討については文献nを参照されたい）。

ここで、五組の対立変数から何故に「集合体志向 対 自己志向」が排除され、結局は「四組」の図式へと整序されるにいたったのかをより原理的に検討しておく必要がある。私は「最も一般的な目的」のためにこの第五の組みあわせを「無視」というパーソンズの新しい見解を基本的に支持するものである。彼は、この変数は行為の内部問題にではなく「相互作用システムの内部問題」にかかわるものであるが故に無視されるという。相互作用システムは、ミニマムには自我—他者のダイアド・モデルによって論理的に説明されうる（図4）。

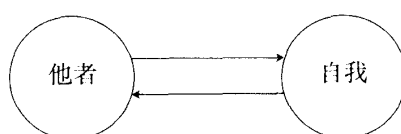


図4

当面の目的にとって、状況 (situation) は他者の集合であるといつてよいから、ここでもまた論理的には「状況=他者」という等式が成立する。自我へのインプットは他者（状況）のアウトプットであり、自我のアウトプットは他者（状況）へのインプットである。その逆もまた同様である。したがってふたつの行為者間の相互連関はひとつの行為者（自我）を状況内に設定することによって原理的に説明することが可能である（図5）。

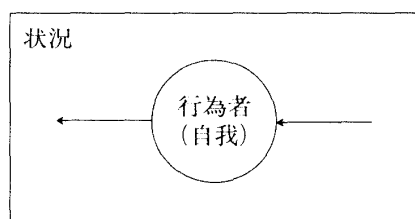


図5

この図では「状況枠組」の内部に行為者が位置づけられている。そして、そのこと自体が「相互作用システム」をすでに含意している。つまり図4と図5は原理的に同一の事態を指し示しているのである。「集合体志向」とは行為者が状況の側に優位性を置く志向であり、「自己志向」とは「自我」の側に優位性を置く志向に他ならない。「孤立したもの」としての行為の内部問題ととりあつかうためには「状況枠組」は不要である。この枠組をとりはずした図は、すなわち、すでに検討してきた図2と同一のものになる。図2によって示される極限的な単一行為(者)モデルを支持することによってのみ「最も一般的な目的」(すなわち行為の一般理論を構成すること)の端緒が切り開かれるだろう。図2のモデルは「状況枠組」を排除することによって、図5のモデルよりも高度の一般性を獲得しているといつてよい。

\*

さて、パーソンズの対立変数図式はここで、以後変更されることのない「四つ」の確定した組みあわせとしてそれなりの結着をみたといつてよいだろう。しかしながらそこには、いぜんとして最も根本的な問題が残されているといわなければならない。すなわち、それ以上でもそれ以下でもなく「何故に四組なのか」という問題である。テキスト《I》の「三組」、《II》の「五組」、そして《III》の「四組」に到達するまで、この図式はいくつもの内容の改変をとまなげながら錯綜した展開をみせてきた。進藤雄三やF.ブリコーのように、「パーソンズのパターン変数の定式化は、社会学史上広く『近代的-伝統的』とよばれてきた社会的行為・社会関係類型の二分法に含まれてきた分析的諸要素のマートンが定義した意味での一つの『系統的整理(“codification”)』である」(文献k, 47頁)として、その学説史的意義を高く評価する論者もいる。

しかしながら、学説史的意義と理論的な意義は厳しく峻別されなければならない。これまでみてきたかぎりでは、パーソンズの対立変数図式には「何故に四組なのか」という問いに対する答えは用意されていない。つまり、この図式を理論的に構成するうえでの選択原理が欠如しているのである。たしかにデュルケーム、ヴェーバー、リントン等の学的諸成果をこの対立変数図式のなかに看取することができるだろう。たとえば、すでに触れたテニースのゲマインシャフトとゲゼルシャフトに関しては、「ゲマインシャフト型変数・筆者」として(「態度」の側の)1.感情性, 2.機能的多面性; (「対象」の側の)3.個別性本位, 4.特質本位を、そしてまた、「ゲゼルシャフト型変数・同」としてはそれぞれに対立する(「態度」の側の)1.感情中立性, 2.機能的限定性; (「対象」の側の)3.普遍性本位, 4.遂行本位を位置づけることが可能である。最終的に除外された他者志向がゲマインシャフト型変数に、自己志向がゲゼルシャフト型変数に属するのはいうまでもないだろう(同, および文献j, 10頁参照)。

だが、この「学説史的意義」を有する対立変数図式は、その選択基準を示す原理が示されないかぎり、恣意性をおびた単なる特徴列挙のレベルにとどまる危険性に常にさらされているといわなければならない。要するに、パーソンズが固執する「一般性」の度合いがここで問われることになるのである。

その危険性をさけるためのヒントは、同じテキスト《III》において展開されるまったく新しいかたちでのパターン変数論のなかに隠されている。

\*

本稿の最初の部分で触れたように、テキスト《III》におけるこの新しい変数論はペールズの四

つの機能的問題との「記念碑的な出会い」によって生まれたものである。それは諸変数間に、ある「親和性 (affinity)」を仮定することから出発する。また、ここで詳細を論じることができないが、行為におけるシンボリズム(認知的シンボルと表出的シンボルの分析上の区別が中心となる)の重要性に着目することによってもこの変数論は大きくささえられている。「認知的シンボルと表出的シンボルの区別——これは多くの研究目的にとって基本的な重要なものである——は、『種類』の根本的な区別とみなすことはできず、共有諸成分の相対的な優位性の区別である。すなわち、あらゆるシンボルは認知的意味と表出的意味の双方を有し、状況における対象と事象に『準拠する』とともに、単一行為者なり複数行為者の態度を『表出する』」(文献 e, p.69)。また、文化の内面化とは、分析上区別されなければならない「対象」の側の諸成分と「態度 (動機づけ)」の側の諸成分を相互にシンボリックに準拠させることによって組織化することに他ならないとして、彼は次のように述べる。「かかる組織化の安定性にかかわる要請は以上のようなものであるので、行為システムの態度成分と状況 (対象・筆者) 成分の間に特定の諸関係が存在しなければならない。この諸関係の類型は、システムの態度の側からの一個のパタン変数成分と、それに照応する状況ないしは対象カテゴリー化の側からの一個のパタン変数成分を組みあわせることによって定式化するものと考えられた。パタン変数のこのような見方は、先行する数多くの構造的問題の分析を経て構想された双方 (「態度」; 図3の「動機志向」, 文献 g における「志向」に相当する。および「対象」; 図3の「価値志向」, 文献 g における「様相 (modality)」に相当する。・筆者) の側の諸変数をすべて交差させて分類するものであって、それは行為システムの理論的諸成分についての現在の新たな総合への道を切り開くものであった」(ibid., p.70)。

かくして、「固有の親和性」を有すると仮定される新しいパタン変数の四つの組み合わせが次のように提示されることになる (cf., ibid., p.179)。

<u>態度</u>	——	<u>対象カテゴリー化</u>
1. 感情性	——	遂行本位
2. 中立性	——	特質本位
3. 限定性	——	普遍性本位
4. 多面性	——	個別性本位

パーソンズはさらに、第二の親和性をもった変数の組み合わせ (1. 限定性—遂行本位, 2. 感情性—個別性本位, 3. 多面性—特質本位, 4. 中立性—普遍性本位) を考えており、第一のセットとあわせて各四つの変数からなるより複雑な (あるいはより煩瑣な) 四つの集合群を設定し、これによって AGIL モデルの最初の図表を提示している (ibid., p.182, figure 2)。しかしながら、AGIL 各位相の「焦点」となるのはあくまでも第一のセットであるから、第二のセットに関してはここで論じることがしない。ベールズの「四つのシステム問題」との関係において AGIL とパタン変数は次のように整理・表示されている (ibid., p.189, なお稿末の図0をも参照のこと)。

- ・適応 (Adaptation) ——ベールズの「適応問題」(普遍性本位—限定性)
- ・目標充足 (Goal Gratification; のちにこれは目標達成 (Goal-attainment) と改訂された・筆者) ——ベールズの「道具的問題」(遂行本位—感情性)
- ・統合 (Integration) ——ベールズの「統合的問題」(個別性本位—多面性)

- ・潜在的なパタン<sup>①</sup>の維持 (Latent Pattern Maintenance) ——ベールズの「表出的問題」(特質本位—中立性)

AGIL という各次元なり位相は、行為システム(個人と集合体)が維持され存続していくうえで必要不可欠な四つの機能(これは機能的要件とか機能的命令とかの用語で示される)をさし示していると考えてよい。ベールズの四つの問題との照応のもとで新たにとらえられたパタン変数図式とは、富永健一が指摘するように、この四つの「機能の内容分析」<sup>②</sup>〈文献 i, 288頁〉をするものであるだろう。

ところで、ここでもまた四組の変数が何故に固有の親和性をもってひきつけあうのか、その仮定の前提(基本原理)が問われなければならない。この点に関するパーソンズによる錯綜した説明に迷いこまないために、私が作成した次の図6を念頭に入れておくことが得策である。

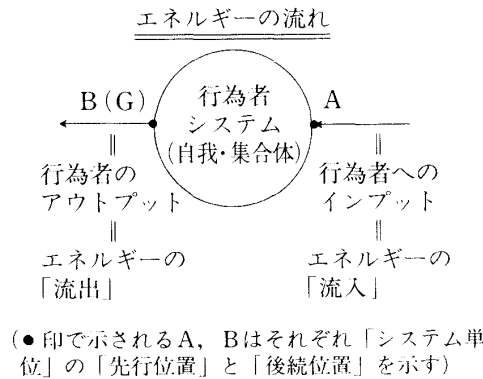


図6

ここではあえて問題としてはとりあげないが、パーソンズに従うならば、社会システム(社会的相互作用)すなわち集合体のシステム単位は「役割(role)」であり、パーソナリティ・システムすなわち個人のシステム単位は「欲求性向(need-disposition)」である〈*ibid.*, p.88〉。エネルギーの流れに関してパーソンズは次のような公準(postulate)を提示する。「行為システムは一方方向的な過程をとるものと考えられる。……『エネルギー』はたえずシステムへと『流入』し、かつ『流出』する。システム自体の内的源泉が自発的にこの過程を逆転させることはありえない」〈*ibid.*, p.97〉。私はこの「公準」を基本的に支持するものである。図6では、エネルギーはシステムとしての行為者へのインプットとして右側から流入し、それはまた変換されたエネルギーとして左側へと「一方方向的に」流出する過程が示されている。なおことわっておくが、この図に示すシステム単位の「先行位置A」と「後続位置B」は、《III》の第三章でパーソンズがAGIL各次元を説明するために用いたものとはその意味合いを異にしている。そこでは各次元それぞれにおける「先行位置」と「後続位置」を示すものとしてA, Bが使われているが〈*cf.*, pp.80-90〉、ここではより一般的な観点からこれを使用している。四つの位相と、その内容をなす親和性を有するパタン変数の四つの組みあわせとの関係は次のように説明されている。

A. (適応)。これは、「状況における対象の諸特性に限定的にかかわる関心の認知的な学習の程度を特徴づける」〈*ibid.*, p.89=chap.III〉のものである。適応が首尾よくおこなわれるためには、(a)「現実」が行為(者)システムに付与する「要請」にたいして、システムの側が自らを調整するという、(b)システムが外的状況にたいして能動的な変形を加えるということ、この二点が必要である。いずれの場合においても必然的に認知的な志向が強調される。外的状況を終局的に統

御するためには、諸対象に関する「一般化された予見 (generalized predictions)」によって「現実的な」判断を下すことが必要とされる。「したがって、行為者の対象に対する関係は普遍性本位的なものたらざるをえない」(ibid., p.183=chap.V)。また、状況が単に「調整」されるものではなく「統御」されるべきものであるならば、この普遍性本位的に規定された特性は、所与の目標—関心に関連した限定的なコンテクストのなかで知覚され、かつ処置されなければならない。「したがって、態度の性質は関心の限定性によって示される傾向を有する」(ibid.)。かくして、A位相の内容は「対象を組織化する」側の普遍性本位と、「態度を組織化する」側の限定性という、親和性をもった二つの変数の結合によって示されることになる。

G. (目標達成)。これは、「陽表的な遂行過程に動機づけが感情的にかかわっているその程度を特徴づける」(ibid., p.88=chap.III・傍点は筆者) ものである。後続位置としてのシステム単位的位置Bは、行為者に、所与の特定の目標志向の成就に関して欲求充足の増大もしくは減少が生じている、あるいは「産出されている」という意味で先行位置Aとは異なっている (図6参照)。位置A、Bに関する先の私の指摘とは一見矛盾するようだが、これは第三章における以上のパーソナリティの説明そのものを、この場合に限ってより一般的な見地に立って「利用した」ということである。図中、Bの右側に (G) とあるのは位置BがG位相を示すということである。位置AはAdaptationの頭文字でもあるので (A) はあえて付さなかった。この位相の「対象への関心 (すなわち『対象の組織化』・筆者) は、欲求充足にむけてそれが為すところのもの、すなわち遂行という観点からとらえられる」(ibid., p.184=chap.V)。また、「先行するいかなる道具的一適応的な諸活動 (A位相における活動・筆者——だがこれは後にみていくように、G以外の全ての位相活動を含むものとしてとらえられるべきである) も早熟な欲求充足への傾向の抑制 (inhibition) に結びついていた。——中略——だが、高潮してきた諸活動が実行に移されようとするときには、欲求充足への抑制は解除され、感情性が目標成就活動にみなぎる」(ibid.)。かくして、この位相の内容は、「対象組織化」の側の遂行本位と「態度組織化」の側の感情性によって説明されることになる。

I. (統合)。これは、「システムにおけるシステム単位の多面的—個別性本位的統合のレベルを特徴づける」(ibid., p.89=chap.III) ものである。パーソナリティ・システム (個人) の場合には、それはシステムの「欲求充足の最適化」にかかわり、社会システム (集合体) の場合にはシステム内諸単位 (諸個人) の「調整」にかかわる。「いずれの場合でも、それは個別的な (particular) 単位が統合される行為—システムの結果的な全体的バランスの問題である」(ibid., p.90=chap.III)。この位相においては「対象はその多面的 (diffuse) ないしは総括的な特性によってとらえられる傾向がある」(ibid., p.185=chap.V)。また、(パーソナリティはことわってはいないが、ここでは明らかに集合体の場合) 「対象への個別性本位的な愛着は自我 (ego) と同一のシステムの成員であることを強調し——中略——共有される諸関心の相互に関連する全体的な複合にかかわっている。自我が愛着するのは、限定的な地位 (specific status) についている他者 (alter) ないしは限定的な役割の遂行者ではなく、むしろシステムの成員として多面的な特性を有した他者なのである。かくして態度の特徴は多面性によって示される」(ibid.)。以上第五章の説明で、「対象」の側、「態度」の側の区別は必ずしも分明ではないが、ともかくもこの位相の内容は、それぞれ、個別性本位と多面性の結合によってとらえられる。

L. (潜在性)。これは「中立性—特質本位という志向成分、すなわち抑制によって中立化された動機づけの緊張の程度を特徴づける」(ibid., p.89=chap.III) ものである。また、「『特質』が確

認されるのは、行為者と遂行過程の諸帰結である対象世界との関係の中においてである」*<ibid.>*。相互作用が中断している期間においても、システムが再始動すべきものであるとするならば、「動機づけのパタン」と「文化的なパタン」は維持され続けなければならない（この二つのパタンは、すでにみてきたことから明らかなように、テキスト《II》における「動機志向」、「価値志向」に、またこの《III》における「態度組織化」規準、「対象組織化」規準に、さらにはまたパタン変数論に彼なりに最終的な結着をつけた文献8における「志向」、「様相」にそれぞれ照応している）。この中断期間においては、二つのパタンは、システムが相互作用状態にある時のように顕示的なものではない（not visible）という意味で「潜在状態」にある。だが、システムがその生命を保持している限りそれは作動している。「それらはその潜在的位相においては、なかならず、他の諸行為システムに自らを委譲してしまうことに対して境界を画するものとして作動する。さもなければ、システムの再活動は妨害され、さまたげられることになるだろう」*<ibid., p.185=chap.V>*。しかしながら「動機づけパタンと文化パタンの維持は、システムが中断状態にあるときだけではなく、特定のひとつの位相（すなわちA, G, I位相・筆者）が優勢であるときにも必然的である」*<ibid.>*し、「活動しているいかなる相互作用位相においても事実上潜在位相は存在する」*<ibid., p.186>*。

また、この位相は他の諸位相とくらべると「前」と「後」のない静止した位相であり、それは「システムの成員としての諸単位間に観察できるいかなる相互作用もない位相である」*<ibid.>*。単位に関して重要なのは、その自足的な特質のありよう（self-contained qualitative state）である。「対象への志向は第一次的にその特質本位によってとらえられる」*<ibid., p.187>*。また、この位相のさらなる第一次的な特徴は、それがパタン化されてはいるが、しかし抑制された動機づけ潜在勢力の潜在的な「貯蔵庫」である、という点である。「かくして、守られた中立性ないしは態度の抑制がこの潜在位相を特徴づける」*<ibid.>*。「対象組織化」の側の特質本位と「態度組織化」の側の中立性が親和性をもって結合し、この位相の内容が示されることになる。

\*

ここでふたたび「エネルギーの流れ」（図6）に戻ろう。パーソンズは次のように述べている。「われわれが記述してきた諸位相は、単にシステムの異なった可能な諸状態の記述ではない。各位相の間には動機づけエネルギーの一方向的な流れの帰結として、決定的・動態的な諸関係が存在する。システムには、A（適応的）位相あるいはI（システム統合）位相を通してG（目標達成）位相へとむかう一般的な傾向が存在する」*<ibid., p.187=chap.V>*。先にみた、「エネルギーの流れ」に関するパーソンズの「公準」*<ibid., p.97=chap.III>*と、章をかえたここでの言明とは完全に一致している。

しかしながら彼はまた、公準にそったこの言明とは明らかに矛盾する見解をも提示している。「これらの留保条件（たとえば微視的—巨視的時間要因や、システム内単位間のコミュニケーションの難易度、単位数等の多くの未知の要因によって位相パタンが異なるであろうということ。・筆者）にもかかわらず、われわれはひき続き説明のために、 $A \rightarrow G \rightarrow I \rightarrow L$ という位相運動を手ごろな『理念的（idealized）』モデルとしてとりあつかうであろう」*<ibid., p.189>*。この位相運動を「公準」に示される「一方向的な過程」と同一視することはまったく不可能である。公準とは何ら関係のないところで「位相運動」が提示されている。換言するならば、 $A \rightarrow G \rightarrow I \rightarrow L$ という「流れ」には、これをささえるに足るだけの理論的な根拠（原理）が完全に欠如しているといっ

てよい。私は、その「原理」はやはり「公準」に立ち帰り、AGIL各位相と親和性を有するパタ



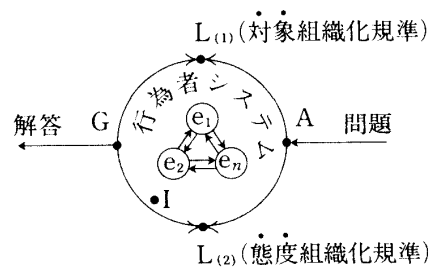


図7

ン変数の組みあわせとの関係を新たな観点から再構成することによってのみ与えられると考える。ここで図7を参照されたい。これは図6をさらに詳細に展開したものであり、これによって私自身の理論仮説を提示してみたい（なお図2もあわせて参照のこと）。

行為(者)システムの維持・存続のために必要不可欠な機能的要件は、●印で示されたAGIL各位相がになっている。eはシステム内要素を示し、nは任意の数を示す。L<sub>(1)</sub>、L<sub>(2)</sub>は原理的にはLというひとつの位相を示している。したがって、各機能的要件（位相・次元）は「四つ」に集約される。

エネルギーの顕在的な流れはA→I→Gという一方向的な順序にしたがって進行する。Lはその中で独特の位置に置かれる。すなわち、顕在的な過程をその背後からささえる「潜在的な」位相として他とは明確に区別される固有の位置を占めている。行為者システムはエネルギーの流れとしての行為過程が「中断」している時でも、常にシンボリックな「行為への傾向」(G.H. ミード)を潜在的に有している。それを可能にするのが、このL位相の機能にほかならない。図中「問題」とあるのは、システムへのシンボリックな「刺激」のことであり、「解答」とは同様システムのシンボリックな「反応」のことである。

A. (適応)。まず最初に、システムが外部から刺激としての問題を受けとる(すなわち「流入」=インプット)と、いまだ値(方向性)をもたない「行為への傾向」はただちにそれをL<sub>(1)</sub>に照合して、問題解決に必要なとされる限りで最大限の対象表象の範囲と配置を見定めようとする。原理的に再構成された「普遍性本位」(「対象」)が含意するのは行為過程のこの第1の局面である。第2に、その見定められた範囲と配置は、L<sub>(2)</sub>に照合されて、その中からいずれの対象表象を限定的にシステム内部に送りこむかという準備がととのえられる(ここで「行為への傾向」は最初の値=方向性をもつ)。「限定性」(「態度」)が含意するのは行為過程のこの第2の局面である。A位相においては、問題としての刺激そのものの内容はまだ明確な像を結んで確認されてはならず「離隔経験」(ミード)のレベルにとどまっている。内容の確認がなされる「接触経験」(同)がおこなわれるのは、次のI位相においてである(なお、A位相については、私はデカルトの方法の第一規則「明証」との関連において詳細に論じたことがある。拙稿文献mを参照されたい。)

I. (統合)。第1、第2の「流れ」を経て、対象表象の範囲と配置が見定められ、限定的な準備がととのうと、第3に、いよいよ行為システムの内部に、問題解決に必要な数だけ(n個)の個別的な対象表象がL<sub>(1)</sub>に準拠してもちこまれることになる(デカルトの第二規則「分析」がこの局面に照応する)。「個別性本位」(「対象」)の理論的含意がこれである。さらに第4に、個別的な小部分に分かたれた対象表象(e<sub>1</sub>, e<sub>2</sub>……e<sub>n</sub>)に対してL<sub>(2)</sub>に準拠しながら多面的な「吟味と熟慮」(トマス)がなされ、各要素間の関係づけが何らかのかたちでおこなわれて問題の内容が確認される。すなわち問題の「解釈」がおこなわれる。L<sub>(2)</sub>に準拠した「多面性」(「態度」)が含意す

るのはこの第4の局面である(デカルトの第三規則「総合」がこの局面に照応するだろう)。なお、図2をめぐる先の私の説明も参照されたい。

G. (目標達成)。解釈が完了すると、最終的にその内的な表象としての「解答」をシステム外部に「流出」(アウトプット)する段階へと到達する(陽表的な行為としてアウトプットされない場合も多いが、それでもそれは可能的に遂行値を有している)。「解答」とはシステムにとって新たなかたち組織化された「対象」の流出にほかならない。すでにみたようにパーソンズも、この位相における対象の組織化は「欲求充足にむけてそれが為すところのもの、すなわち遂行という観点からとらえられる」と指摘しているように、行為過程の第5の局面は、 $L_{(1)}$ に準拠した「遂行本位」(「対象」)によって特徴づけられる。さらにまたパーソンズが指摘したように、「高潮してきた諸活動が実行に移されようとするときには、欲求充足への抑制は解除され、感情性が目標成就活動にみなぎる」。行為過程の第6の局面、すなわちエネルギー流出の最終局面は $L_{(2)}$ に準拠した「感情性」(「態度」)によって特徴づけられる(おそらくこのG位相には、デカルトの第四規則「枚举」との「親和性」を読みとることができるだろう)。

以上、行為過程(エネルギーの流れ)は、巨視的には $A \rightarrow I \rightarrow G$ 、微視的には第1局面から第6局面へと順を追って「一方向的に」進行する。その逆転は決して許されるものではない。この行為過程を私はL位相の「潜在」に対照させて行為の顕在的過程とよぶことにする。

L. (潜在性)。図6ではこの位相は $L_{(1)}$ (対象組織化の規準)と $L_{(2)}$ (態度組織化の規準)に区別されて示されている。なお、前者がテキスト《II》における「価値志向」に、後者が「動機志向」に、さらには文献8における「様相」と「志向」に照応するものであることはいままでのない。他の三位相とは異なった独特のこの位相はパーソンズによれば、他の行為システムとの「境界を画する」ものであり、活動中の他位相においても「事実上存在する」ものであった。さらにまた「静止した位相」として「いかなる相互作用もない位相」でもあった。これは要するに、この位相はシステムの「集合基準」そのものをさし示しているということである。顕在的な過程の背後にあり、常にその活動を潜在的に支え、かくすることによってシステム・アイデンティティを保障する「諸潜勢力の貯蔵庫」なのである。 $L_{(1)}$ とは、内面化された対象の諸特質の潜在的な貯蔵庫であり、その起源はもろもろの対象からなる環境世界にある。すなわち $L_{(1)}$ は「特質本位」(「対象」)によって特徴づけられる。 $L_{(2)}$ とは、内面化された対象への諸反応(態度)の潜在的な貯蔵庫である。潜在的である限り、この位相においてはいかなる感情も解発されることはない。起源的にみても有機体の反応は、個体発生的な意味でも系統発生的な意味でも、本来いかなる感情性も有しないものだったはずである。かくして $L_{(2)}$ の特徴は「(感情)中立性」によって示すことが可能になる。

\*

以上で、テキスト《III》におけるパタン変数とAGIL各位相に関するパーソンズの錯綜した「理論」を再構成し、私自身の新たな理論仮説を提示する作業を一応終えることにする。本稿の最初の部分で提起したパタン変数論のパラドックス(理論的な逆転関係)問題は、おのずからうきぼりにされたはずである。私の理論仮説によれば、親和性を有したパタン変数の四つの組みあわせは、行為システムの維持・存続のために必要不可欠な四つの機能的要件のありかを示すAGIL各位相の組織(構成)原理を説明する理論装置としての資格を十分に備えたものである。ひるがえって、時間的には先行するテキスト《I》、《II》(および文献c)における対立変数の三ないし五な

いしは四つの組みあわせの選択は（学説史上の意義はどうあれ）理論的には恣意的なものであり、そこには選択（構成）原理がまったく欠如しているといわざるをえない。時間的には後続するテクスト《III》の変数論が先行変数論に対して、実はそれに「四組」の選択原理を与えるものとして理論的には「先行している」というひとつのパラドックスをそこにみとることができるのである。

## 「維持的」局面（二重線の上）

ベールズのカテゴリー 消極的運動	パーソンズのカテゴリー 逸脱のタイプ	ベールズのカテゴリー うまくいった社会的制御の成分	ベールズのカテゴリー 積極的運動	パタン変数に関連した諸次元
12) 対立性を示す (能動的)	攻撃性 (能動的)	支持 (能動的)	1) 連帯性を示す (能動的)	統合的次元における主要変動 態度： <u>多面的な</u> 欲求性向のかたちでのカセクシス 対象との関係： <u>個別性本位的</u>
11) 緊張を示す (受動的)	撤回 (受動的)	容認 (受動的)	2) 緊張の解発を示す (受動的)	表出的次元における主要変動 態度： <u>中立的な</u> ままの一定の感情的諸傾向（抑制） 対象との関係： <u>システムの所与の</u> 特質性による
10) 同意しない (受動的)			3) 同意する (受動的)	
9) 提案を求める (受動的)	強制的遂行 (能動的)	互惠性の否定 (受動的)	4) 提案する (能動的)	道具的次元における主要変動 態度：行為への流出を許された一定の感情傾向 対象との関係： <u>期待された</u> 遂行による
8) 意見を求める (受動的)	強制的受容 (受動的)	状況の操作 (能動的)	5) 意見をいう (能動的)	適応的次元における主要変動 態度： <u>限定的な</u> 関心によるカセクシス 対象との関係： <u>普遍性本位的</u>
7) 志向性を求める (受動的)			6) 志向性を与える (能動的)	

## パタン義務履行局面（二重線の下）

## 図 0

\*この図に関してパーソンズは次のようにコメントしている。「(この)図式表ではオリジナルな用語がそのまま使われており、ある箇所ではこれらの用語が、最も一般的な事例というよりもむしろ特殊な事例を示している点に注意することが肝要である」(文献 e, p.72)。つまり、すべての用語が必ずしも高度の一般性を有するものではない、ということ指摘している。なお「パタン変数に関連した諸次元」における ~~~線は筆者が付記した。

## 文 献

- (テクスト《I》) Parsons, T., "The Professions and Social Structure" 1939, in Parsons, T., *Essays in Sociological Theory* (revised edition), Free Press, 1954.
- (テクスト《II》) Parsons, T., *Toward a General Theory of Action* (editor and contributor with shils, E. A. et al.) (originally published by Harvard University Press in 1951.) HARPER TORCHBOOK edition (reprinted by arrangement) 1962. (永井道雄他訳『行為の総合理論をめざして』日本評論社, 1960.)
- Parsons, T., *The Social System*. Free Press, 1951. (佐藤勉訳『社会体系論』青木書店, 1974.)

- d. Parsons, T., "The Superego and the Theory of Social Systems" 1952, in Parsons, T., e and h (拙訳「超自我と社会システム論」文献h, 訳書第一章)
- e. (テキスト《III》) Parsons, T., *Working Papers in the Theory of Action* (in collaboration with Bales, R. F. and Shils, E. A.) Free Press, 1953.
- f. Parsons, T., *Economy and Society* (with Smelser, N. J.) Routledge & Kegan Paul, 1956. (富永健一訳『経済と社会I・II』岩波現代叢書, 1958.)
- g. Parsons, T., "Pattern Variables Revisited: A response to Robert Dubin" 1960, in Parsons, T., *Sociological Theory and Modern Society*, Free Press, 1967.
- h. Parsons, T., *Social Structure and Personality*, Free Press, 1964. (武田良三監訳『社会構造とパーソナリティ』新泉社, 1973.)
- i. 富永健一, 文献f, 訳書I, 訳者解説(I).
- j. 下田直春「社会構造の二元性とその原理：構造機能主義理論の再構成試論」『応用社会学研究』No.13, 立教大学社会学部, 1969.
- k. 進藤雄三「パーソンズの社会システム論」中久郎編『機能主義の社会理論：パーソンズ理論とその展開』第二章, 1986.
- l. 拙稿「ミード行為論の機能論的再構成：衝動論を中心として」ナタンソン, M.『G.H. ミードの動的社會理論』(長田攻一・川越次郎訳) 新泉社, 1983, 付論.
- m. 同「行為論としてのデカルトの方法：一般行為論構想の一環として(1)」『聖徳学園岐阜教育大学紀要』第16集, 1988.
- n. 同「パタン変数の構成問題：パーソンズ『再訪』論文を中心に」『社会学年誌』第30号, 早稲田社会学会, 1989.
- o. 同「力への意志と善き意志：行為論の以前に」『聖徳学園岐阜教育大学紀要』第23集, 1992.